

idea

ニュースレター「アイデア」

2024.9

NPO・地域・企業・行政の情報発信により、「アイデア」と「であい」の機会を創ります。

- 1 | 二言三言 | はなほこども園 園長 宇津野泉さん(後編)
- 3 | 団体紹介 | おはなしと影絵劇の会 野の花
- 5 | 地域紹介 | 渋民11区自治会(大東)
- 7 | 企業紹介 | 株式会社 丸越(花泉)
- 8 | 博識社のフクロウ博士 | 地域運営の落とし穴⑤ 地域協働体(RMO)の存在意義
- 9 | センターの自由研究 | くらし調査ファイルNo.26 「ママさんバレー①」

今月の表紙

大東町鳥海(興田)にある「大東バレーボール記念館」付近の防護柵(ガードパイプ)。虹の横に描かれたのはレシーブをする瞬間のバレーポラーの姿。この柵の設置時期や経緯は定かではないものの、同記念館の建設(平成7年)に合わせてリニューアルしたと推測されます。当時の大東町がバレーボールに力を注いだ背景とは？(自由研究)

idea

発行 いちのせき市民活動センター
せんまやサテライト 〒021-0881 一関市大東4-29 なのはなプラザ4F Tel 0191-26-6400 Fax 0191-26-6415
〒029-0803 一関市千厩町千厩字町149 Tel 0191-48-3735 Fax 0191-48-3736

ホームページ: https://www.center-i.org/ メール: center-i@tempo.onn.ne.jp

お知らせ

情報

「はなほこども園」園庭一般開放

本誌「二言三言」で紹介した社会福祉法人花泉福祉会が展開する幼保連携型認定こども園「はなほこども園(旧称:花泉保育園)」では、子どもたちが自由に集まることのできる公園のような場所をイメージし、園庭を一般開放(在籍園児以外の家庭も自由に遊ぶことができる)しています。
月～土曜日(開園日)は9時～17時、日・祝日(休園日)は日没まで、園庭内の遊具を自由に利用できます。詳しくは下記まで。



URL: https://hanahokodomoen.com/
※「はなほこども園」と検索すると上位に出できます。
問合せ: 0191-82-2167 (はなほこども園)

イベント

社会福祉法人ふじの実会「創立40周年記念コンサート」

昭和59年2月に設立し、藤沢町を中心に事業所を複数開設する「社会福祉法人ふじの実会」は、今年で創立40周年を迎えました。
これを記念するとともに、地域の皆様への感謝の気持ちを込め、「混声合唱団イーハトーヴシンガーズ」による記念コンサートを開催します。
公演内容や入場整理券配布方法などの情報は、9月20日頃までにHPに掲載予定です。詳しくは下記まで。



開催日時: 令和6年10月5日(土) 15時～16時
場所: 藤沢文化センター(縄文ホール)
出演: 混声合唱団イーハトーヴシンガーズ
入場料: 無料(要入場整理券)
問合せ&申込: 0191-63-5321 (同法人本部事務局)

募集

「おはなしと影絵劇の会野の花」会員募集

本誌「団体紹介」で紹介した「おはなしと影絵劇の会 野の花」では、一緒に活動する仲間を募集しています。
現在の会員は70～80代ですが、会員の年齢、性別、居住地、経験の有無は不問で、「影絵劇」に興味・関心があれば誰でも入会可能です。詳しくは下記まで。
※活動日や時間等は変更になる場合がありますため、見学を希望される方は事前にご連絡ください。

活動日: 毎月第4日曜日
時間: 13時30分～15時30分
場所: 一関市山目市民センター(一関市青葉2丁目4-5)
問合せ: 0191-23-5256(代表:鈴木)

イベント

「ごさいんマルシェ」開催&出店者募集

一関市大東町でマルシェを開催したいという思いから地元有志で令和6年6月に「ごさいんマルシェ実行委員会」を発足しました。
「市民の交流」を目的に開催するマルシェで、地元の農産物、食品、工芸品等を持ち寄り、来場者や出店者、運営者もみんなが楽しめる出会いの場です。詳しくは下記まで。



開催日時: 2024年10月6日(日) 10時30分～14時
場所: 一関市大原市民センター(一関市大東町大原川内5-1)
販売品目: スイーツ、農産物、手作り雑貨、マッサージ、フリーマーケットなど
問合せ: 090-2028-5925(事務局:岩淵)

イベント

花の駅軽トラ市&手づくり雑貨マルシェ

清田花の駅軽トラ市開催実行委員会では、「花の駅軽トラ市&手づくり雑貨マルシェ」を下記日程で開催します。
通常の軽トラ市に加え、ハンドクラフト雑貨の販売やワークショップ、キッチンカーなど、約30店舗(軽トラ含む)の出店を予定しています。詳しくは下記まで。

日時:
〈第3弾〉9月15日(日) 9時～12時
〈第4弾〉10月20日(日) 10時～15時
※第1弾～第2弾はすでに終了。
※雨天中止
場所: 花の駅せきまや駐車場
※国道284号「清田テニスコート(千厩町清田落合2-1)」向かい
問合せ: 090-3758-0469 (事務局:千葉)

募集

「イチコレ第5回コンテスト」エントリー募集中

今年で開催11回目を迎える「イチコレ」こと「いちのせき市民モデルコレクション」。一関市にちなんだテーマに沿って自由な表現を楽しむコンテスト部門「イチコレ第5回コンテスト」の参加者を募集中です。
今年のテーマは「一関が誇る『酒』」に決定! 詳しくは下記まで。



開催日時: 2024年11月24日(日) 10時30分～13時30分
(うち、コンテスト部門は1時間程度)
場所: なのはなプラザ2階 特設会場
募集組数: 先着20組(年齢、性別、居住地、経験等不問)
主催: 一関市 いちのせき市民活動センター
問合せ: 0191-26-6400 (いちのせき市民活動センター)

まちの写真展

スタッフがまちの1コマを切り取ります。

作品名 「実は花泉町内にもう1か所……」



県道48号弥栄金成線の花泉町金沢を通行中(内沢集落エリア)、視界に入ってきたピンクのドア。横に置かれたバイクのヘルメットの色とお揃いなので、アート作品のようにも見えます。この土地の借用地主が思い付きで設置したのだとか。敷地に立ち入りせずにご覧ください。



旧町村別の人口動態等を共有します。

	人口	前月比	世帯数	前月比
一関	53454	-53	24630	-13
花泉	11663	-9	4681	2
川崎	3174	-9	1269	-1
千厩	9537	-19	4082	-3
大東	11505	-21	4857	0
東山	5720	-14	2269	-5
室根	4265	-4	1803	2
藤沢	6922	2	2791	6

一関市全体		前月比
人口	106240	-127
世帯数	46382	-12
出生数	31	-1

2024年8月1日付
(2024年7月31日現在
住民基本台帳より)
※外国人登録者含む

180 / 106,240
 はなほこども園 宇津野 泉

社会福祉法人花泉福祉会が展開する幼保連携型認定こども園「はなほこども園(旧：花泉保育園)」の園長(令和6年度より就任)。両親の経営していた同園に事務職で20年以上関わりながら、日本保育協会岩手県支部の事務局長はじめ、一関市総合計画審議会委員など、様々な組織・会議でも活躍。「地域に開かれた施設」として、保育・教育を行っている。



年長児が和太鼓に取り組む同園。4月に開催する「はなほこどもまつり」では、前年度の卒園児が太鼓を披露。各種行事には卒園児や地域住民を積極的に巻き込んでいる。

第121回 はなほこども園 園長 宇津野 泉 × いちのせき市民活動センター センター長 小野寺浩樹

トランスフォーメーション
 「変革」に不可欠なものは「組織力」
 ~小さな「気づき」を積み重ねて【後編】~

「DX成功事例〇選」など、DX化の先進事例がもてはやされる昨今。それらに共通するのは、単なる「デジタル化」ではないという点です。当市内にもDX化に取り組む企業・組織が増えていますが、時代に合わせた「トランスフォーメーション」変革、変換」を行うために必要な視点とは何なのか、花泉町にある「はなほこども園(幼保連携型認定こども園)」の実例を基に考えます(2回シリーズの後編)。

小野寺 組織改革の取組や様々な発想・気づきを具現化した事例をお聞きしてきましたが、コロナ禍で考え直したり、転機になったことはありますか？

宇津野 コロナ禍で改めて感じたのは、人と人との交流、地域との交流、異年齢との交流、そういう交流の機会は減らさずべきではなかったなあということ。コロナ禍では様々な感染予防対策をしたものの、結果として、保育現場にいる個人人としては「子どもの成長にとってはマイナスだった」と感じたんです。

人との関わり、地域の高齢者含めた異年齢の方たちとの関わりによって、自分は大事にされているんだと実感できる経験をもっとも増やしたいなと思

い、職員ともその思いを共有し、重点的な取組視点にしています。**小野寺** 交流機会の在り方を改めて見つめ直したんですか。

宇津野 例えば行事の持ち方に保護者の支援にもなるし。「見せる保育」をしようと思うと辛い。普段通りの、日常の中に入ってもらうからこそ良い、と。

小野寺 やつぱりちよつとした考え方の違いですね。前回お聞きした「お米とき当番」も、先生たちにとっては負担が増えるのでは？と思ってしまうんですが。

宇津野 「今日は私が当番！」と張り切っている「やりたい気持ちの子」と一緒に行うので、負担という感覚はないです。給食当番は実情に応じて柔軟に変えていて、なるべく外で遊ばせたい時期は、外遊びの時間を優先して、当番は置かなかつたり。

小野寺 これは大人、職場にも通じる話ですね。「やる気、モチベーションを上げましょう」なんてキャッチフレーズのように言うけど、モチベーションが上がるような進め方、些細な目標を作るようなことすらしていなかつたり。目標を作らせたなら作らせたで「そんなのできるか」って抑えてみたり……(笑)

宇津野 みんなでアイディアを出して、みんなで創り上げてい

ついで。簡素化により業務が省力になり、「負担が減り、余裕が出来て楽になった。良かったね」というだけで終わってはならないと焦りました。改めて教育・保育的「ねらい」から新たなアプローチを検討しつつ、「保護者支援」の観点からも、どのように参加してもらうことが良いのか練り直すように努め、様々な発見がありました。

小野寺 「簡素化」良くない、簡素化すると視点まで簡素化してしまいますよね。**宇津野** そう。実は5類に移行する直前の令和5年4月に、大々的なイベントをしたんです。法人設立50周年の事業がコロナ禍でできていなかったため、記念事業をすることにしたんですが、従来であれば、関係者を招いての式典・会食というもの。そうではなく、みんなを集め、楽しめるものにするので、地域に貢献しようと企画し、法人役員の理解もあり実現しました。

こうという意欲を持てる環境づくりは大事だと思っています。みんな理屈では分かっているんですよ、良くするためのPDCAサイクルが大事って。やる気があれば、実践は負担ではないはずですよ。

小野寺 そう、理屈は分かっているのに、やる気と、「やれる環境」がない。その環境を作ってあげることが大事ですね。**宇津野** 50周年記念事業が好評だったので、4月に春祭りとして続けていくことにしたんです。続ける上で、「職員も共に楽しむ」ということを目標にして、今年はずっと楽しめました。

小野寺 そういう「想い」をみんなが共有できているというのが大事なことですね。

宇津野 人間関係が良好で、充実感や達成感を感じられ、仲間意識や助け合う、思いやる関係性があつてはじめて、「変革」なんじゃないですか？

小野寺 まさに。「底辺のところがないと何も始まらない」ということが、よく分かりました。

関係機関や地域住民、卒園児などにもお知らせを出したことで、500人近く集まったんです。5類移行の前なので、来場者名簿を取るなど、感染拡大予防もしたので、手間はかかりましたが、役員・職員含め、みんなが「楽しかった」と言ってくれて、このような直接関わり合える機会が必要だと実感できました。

小野寺 従来の式典形式から「おまつり」スタイルにするというのも、ある意味トランスフォーメーションですよ。

宇津野 やるのであれば、一部の人の自己満足ではなく、いかにその時間を多くの人と共有できるか、だと思っんです。もしかしたら、この機会を逃せば、もう二度と関わる機会がない人もいるかもしれない。その御縁などに感謝して、いかに充実して楽しめるか……。

小野寺 今、そういうことを言ってくれる人がいないんですよ。今日という時間、50周年という機会はもう2度とないよ。だからできるベストを尽くそう”っていう考え方を。集落の集まりなども「コロナ禍でや

めたら楽になったね”っていう声が多いですが、「今」という「今しかない時間」も失っているということですね。**宇津野** 「今しかない時間」と言えば、当園では毎月行うお誕生会に、当該園児の保護者が参加できるんです。「こんなに大きくなったのね」と感動する時間を、職員だけで終わらせるのはもったいないなって。最初は誕生会のみ見てもらってましたが、今は給食バイキングにも参加できるようにしたんです。園児たちと一緒におぼんを持って並んでもらってます(笑)

小野寺 確かに、自分の子どもが園児だった頃を振り返ってみると、「もつと見たかった」と思いますよね。運動会などの行事だけじゃなく、そういう日常の一コマを。でも先生たちからしたら、保護者が来るというのは、余計な気を使ったりして、大変じゃないですか？

宇津野 「保護者に園の生活を覚えてもらった方が楽だよ」と話しています。園での姿を見て理解してもらえれば、細やかに知らせる労力が少なくなるし、

※2 Plan(計画)、Do(実行)、Check(評価)、Action(改善)の頭文字を取ったもので、業務・事業改善等に取り組むためのフレームワーク。P→D→C→Aと、4つのステップを順番に繰り返すことで、継続的な業務・事業改善につなげていくもの。

※1 情報誌『idea(本誌)』2024年8月号「二言三言」参照

団体紹介

おはなしと影絵劇の会 野の花
前身となる「おはなしの会 野の花」を平成8年4月に発足し、平成10年4月に「おはなしと影絵劇の会 野の花」に改称。毎月第4日曜日の定例活動(場所：一関市山目市民センター)ほか、市民センターや地域サロンなどのイベント出演依頼に対応。現在の会員は3名。

住所：一関市新大町145(代表・鈴木)
TEL&FAX 0191-23-5256

写真：第40回一関市山目市民センターまつりで披露した「アナシンと五」(令和4年)



日々の練習は 一瞬の発表のために

映し出された人形の「影」の繊細さと、人形に合わせて変幻自在に演じ分けられた役者の表現力に、思わず見入ってしまう「影絵劇」。25年以上活動を続ける「おはなしと影絵劇の会 野の花」が行う「影絵劇」は、指を広げたり、手を重ねて表現する「手影絵」ではなく、台詞や歌などに合わせて紙で作った「人形」を巧みに動かしながら演じます。

同会は、毎月第4日曜日に定例活動を行い、人形の角度や位置、登場のタイミングなどの練習に励んでいます。代表の鈴木規子江さんは、「一つの話を披露するまでに2年はかかります。発表は5分程度なのでとても儂いですが、舞台と一緒に、登場のタイミングが重要。タイミングが早い、遅い、出方が悪い……など、細かなタイミングで印象が変わるので、発表がなくても練習はし続けたいという気持ちです。」と話します。

これまで完成させた作品は10演

「影絵劇」に魅せられ、魅せ続けて

目(赤ずきん、三びきのやぎのらがらどん、笠地蔵など)。新しい作品を覚える間、過去に覚えた作品を忘れないよう、練習の中に振り返りの機会も入れています。

幼少期の「思い出」が生んだもの

平成8年4月、30代(当時)の女性を中心に結成された「おはなしの会 野の花」が同会の前身。市外から嫁いで来た人や転勤で来た人も多く、友達づてで自然と集まり、仕事や家事の終わった夜間に集まっていました。「野の花」には、「人さえいれば野っばらでも『おはなし』はできる」という意味が込められています。

結成時から代表を務める鈴木さんは、「もともと昔話の読み聞かせに興味があつて、その気持ちを周りに話していたら、同じ想いの人たちが集まって、団体結成へと発展したんです」と振り返ります。当時は影絵劇ではなく、図書館を中心に絵本や紙芝居などによる読み聞かせを行ってききましたが、

平成10年4月、現在の団体名へと改称

「幼い頃に白黒テレビで見ていた影絵劇の記憶が忘れられず、『おはなしの会』に『影絵劇』をプラスした」という鈴木さんは、「テレビで見たのは、人形が馬とポニーテールの女の子だったのを今でも覚えています。ペーパーサート(紙人形劇)のように人形を支えている棒が見えていることに、どこか魅力を感じました」と微笑みます。

10人程で結成した同会ですが、手伝いをきっかけに会員になる人や、そのまま手伝いとして参加する人、時には高校生のボランティアグループに応援を求めたり、「知人友人の力を借りながら今日に至ります」と、周囲の協力に感謝しながら、現在は3人で活動を続けています。

同会会員として10年以上活動する鈴木規子さんは、「初めて同会の影絵劇を見たときは5、6人でやっているものだと思っていましたが、私が入会するときには会員が4人しかおらず、驚いたことを今でも覚えてます」と振り返ります。20年以上活動する会員の福西享子さんは、「鈴木さんに誘われて今日を迎えています。影絵劇の魅力を感じながら、同会の活動が外出のきっかけにもなるので、病気にもなりません。出かけられる場所、用がある

ことは大事です」と笑顔で話します。

手作りにこだわり続ける

昔話を参考に物語を短くまとめた脚本づくり、紙やダンボールなど身近にある材料での人形制作、脚本に合わせた声の録音等、自己流で影絵劇を創り上げてきた同会。鈴木さんは脚本づくりのほか、人形制作も行います。「既製品の人形だと物語が想像できず、気持ちが入りません」と、同会は手作りにこだわり続けています。

人形の動作一つや声のトーンなどで雰囲気が変わるため、手や顔などの角度、台詞の調整は細かく行います。鈴木さんは、「脚本を読みながら声を録音して、その声を確認して、『これ良いね』とか『このときはこうしたほうが良い』など、お互いに刺激し合っているの、読んでいくうちにしゃべりが上手くなっていくことを実感しています」と笑顔を見せます。

声がかかれば市民センターや地域のサロン、イベントなどへ積極的に参加している同会は、見ている側を楽しませながら、やっている側も一緒に楽しむことを大事していると言います。影絵劇の魅力を「すぐにできないこと。

おはなしと影絵劇の会 野の花

Q.同会の自慢は？

代表



A. 会員が同じ方向を見ていること

会員



A. 和和和(なごやか)

鈴木 規子江さん
前身の団体から代表を務め、28年目。「この会がここまで続くとは思っていません」と、立ち上げた鈴木さん自身が驚いています。

福西 享子さん(左)
& 松本 牧子さん(右)
鈴木さんと知り合いだったという関係から入会したお2人。「3人で一人前です」と笑顔で話します。

創り上げていく楽しさもあり、キレイに仕上がったものではなく、創り上げていく過程も見たいです」と話す鈴木さん。影絵劇の魅力も伝えながら、「思い出」の連鎖を生んでいきます。

- Photo

gallery -



息を吹き込む
同会では台詞を録音することを「吹き込み」と呼び、台詞だけでなく、物語に合わせた童謡を歌うことも。



舞台の裏側に潜入

同会では「楽屋」と呼んでいる裏側を覗くと、物語のシーン毎に作られた人形が床にズラリ。出番を待っています。



繰り返される微調整
人形のちよつとした角度などでも見ている側の印象が変わるため、物語のシーン毎に調整・練習を重ねます。



10年以上、愛用
練習の度に組み立てる木枠は、同会の活動を応援する方が厚意で作ったものです。大切な道具の一つです。

渋民11区自治会(渋民)

行政区は渋民11区。91世帯205人(11世帯11人は外国人)が暮らす。内、自治会加入は52世帯(5班体制)。65歳以上の割合は渋民地域の中で一番低い36.6%。子育て世帯等が入居するアパートがあり、「ひまわり子ども会」を通し、児童やその保護者との交流がある。



左の写真：女性部主催「ひまわりサロン」の集合写真(令和6年7月)

各種役割の分担と事業の効率化

渋民地域の北西に位置し、北は興田地域、西は猿沢地域との境に接する渋民11区自治会。誘致企業(2社)やアパート(2棟)、「産直ふるさと大東」も立地します。この産直の前身は、同自治会が集落内に2か所設置した無人直売所(平成2年の「ふるさと創生事業補助金(旧大東町)」を活用)で、農業に従事する高齢者等の生きがいづくりの一環でした。

自治会組織が発足した正確な年代は不明(現在の会則は平成元年から)ですが、同自治会役員は「今の90代の方々が40代の頃には古い集会所があったので、50年以上前には組織化されていたのでは」と回想します。自治会には総務(執行部)、体育、文化、生活環境、女性、納税、防災の7つの専門部会があるほか、自治会以外にも組織・役があるため、各世帯が何かしらの役を持ち、かつ、複数の役を持たないよう(1世帯1役)、総務部

大東 渋民11区自治会

が調整しています。

また、近年は少子高齢化の影響もあり、住民が参加しやすいよう事業の見直しを図っており、女性部事業の「ひまわりサロン」の開催に合わせて防災部事業を実施したり、文化部事業の伝承講座(以前は「ひまわり子ども会」と共に実施)も、サロン活動に組み入れていきます。取材した7月も、同サロンでは「七夕飾り」を制作しながら、三升炊きのガス炊飯器を用いての炊き出し訓練や、模擬消火体験などを実施。時代に合わせて、柔軟に事業を組み立てています。

※1 関市社会福祉協議会登録のサロン活動ではなく、自治会独自で開催。年8回程開催。

交流の拠点「渋民ひまわり会館」の誕生と活用

同集落内に誘致された企業(現在とは別企業)と親睦を深めるため、隣接する猿沢地域の新渡戸自治会、当該企業2社の従業員とで「交流運動会」を開催(平成初頭に2年間)していた同自治会。すでに集

所はあったものの、これを機に「従業員たちとの交流を図る場所が欲しい」と考えた同自治会は、国の補助金を活用し、若者等創作活動施設「渋民ひまわり会館(自治会館)」を平成9年に新築します。「住民一人ひとりに輝いて欲しい」という思いが込められた愛称で、この施設を拠点に、自治会内に「習字」「舞踊」「卓球」等の同好会が発足。舞踊と卓球は講師が高齢となり現在活動休止中ですが、習字教室は現在も活動中で、ミニ文化祭(同会館で文化部が企画運営)において展示をしています。

「子ども会」を支援し、顔の見える関係へ

「ひまわり子ども会」及び同育成会は、自治会が発足した頃からすでに活動しており、当時から続けている夏休み中の「ラジオ体操」は、やり方を変えながらも自治会との共催事業として継続してきました。現在は、児童やその保護者、そして自治会員などが平日朝6時30分にひまわり会館前へ集まり、早朝の日差しを浴びて朝のリフレッシュ時間を共に過ごします。

「子育て世帯の方々と自治会と子ども会の共催事業で間接的に繋がって

いる。『互いの顔を知る・知っている』という関係性は築けているのでは」と語るのは、自治会長の小野寺悦朗さんです。自治会未加入のアパート住民児童らも、子ども会には属しており、自治会が子ども会支援を行うことで、自治会未加入の子育て世代層とも交流が図れています。

行政区长で自治会副会長^{※2}でもある佐藤清司さんは「昔は地元小学校もあり、家族・近所ぐるみで顔を知ることができていた。今は、子どもも少なく、アパート世帯もあるので、できるだけ交流事業は継続していきたいですね」と今後への意欲を見せます。

50年以上も続く「元朝参り」も交流事業の一つで、今年は親子合わせて16名が参加。暗闇の中、渋民八幡神社まで片道1.4kmを親子で歩き、神社では自治会で準備したみかんを食べます。ひまわり会館前に設置する冬のイルミネーションも、20数年前から環境部と子ども会が合同で実施するなど、子ども会との関わりを大事にしています。

「なにかあったらバツと手伝いに行ける、そんな輪を広げたい。少子高齢化が進むからこそ『お互いの顔を知ること』が大事であり、ひまわりのように明るく生き生きと、みんなが互いを支え、『小さなおせっかい』ができ

Q. 集落の自慢は何ですか？

自治会長



A. たぐましい女性 たおやかな男性

女性部長・副部長



A. みんなが協力的な11区です

おの 小野寺 悦朗さん
2期4年目。副会長1期2年を経て自治会長に。「ゆったりと流れ、それに見合った活動・行動スタイルに変化」と、同自治会をドナウ川に例えて表現します。

こんの 良子さん(左)
& 細川 より子さん(右)
ともに2期3年目。ひまわりサロンの開催案内は可愛いイラスト入りのチラシを手書きで作成しています。

る集落でありたい」と微笑む2人。同自治会の基本目標「手をとりあつて、より良い地域社会をめざそう」を具現化していきます。

※2 同自治会では慣例的に行政区长が自治会副会長(2名のうちの一人)を担う。

- Photo

gallery -



広報や花壇、サロンなどにも「ひまわり」の文字が。「一人ひとりがひまわりのように輝いて」という思いを込めています。

ひまわりは渋民11区

半世紀続く元朝参り



元旦朝6時、渋民橋に集合し、渋民八幡神社まで徒歩で参拝。室根山からの初日の出も拝み、一年の無事を祈願します。

もしもの備え防災訓練



事業の見直しを経て、サロンとの合同開催。30名ほどの住民が集まり模擬消火体験を実施しました。炊き出しやテント設置も。

夏休みの健康づくり



時代の変化や少子化などで実施が難しくなった夏休みのラジオ体操。子どもも保護者もご近所さん、一緒に1・2・3!

花泉 株式会社 丸越

全国各地から各種青果物・農産加工品を仕入れ、青果として卸せないものは加工し、食品工場やスーパー、個人飲食店等の外食産業に販売するなど、青果物および食品の流通加工を行う。旧本社の創業は昭和28年(長崎県諫早市)で、地元の4兄弟が生姜販売を開始。四男(初代)は、当時の花泉町に東北営業所を開設(昭和45年)、同営業所は事業拡大に伴い「株式会社丸越」として法人化(平成6年)。同年、本社所在地を現住所に移し、旧本社を長崎支店と改める。初代に後継者がいなかったことから、事業継続のため遠藤商事株式会社(代表取締役・遠藤靖彦氏※)のグループ傘下となり(平成20年)、現在もこだわりの青果物を全国に流通させている。※山形県本社の石油関連企業。M&Aにより株式100%取得。

「安心・安全」な青果物を「安定して」消費者へ

有機栽培や無添加等、農産物へのこだわりを持って

株式会社丸越の初代は、兄弟たちと個人事業主として昭和28年から長崎県で「生姜販売」をスタートし、自身は東北に行商へ。その中で東北における生姜販売の可能性を感じ、花泉町(当時)に東北営業所を開設(昭和45年)します。

東北営業所への工場併設、冷蔵施設や貯蔵施設の拡張を経て、平成5年には生姜のみならず、全国各地(地元含め)の青果物の取り扱いを開始し、パック包装等にも対応。翌年には法人化(独立)しました。

また、「有機栽培の国内産生姜やにんにくが無い」ことに着目すると、小分け業者および生産工程管理者の有機JAS認証を取得。試験栽培を経て、平成17年、藤沢町(当時)に自社農園を立ち上げると、生姜・にんにくの有機栽培をスタートしました。「農産物は、作る土地・自然環境、そしてそこに生産者の思いも加わり『味』や『安心感』というものが生まれます。生産者と一緒に、水や土、肥料などについて話し合いながら『食づくり』のサポートをしています」と、同社常務取締役の片平忠明さんは語ります。

同社では、パック品として出荷できない原料も無駄にすることなく、衛生管理システムを備えた専門工場で一次加工(100%無添加・無着色。不純物なし)し、食品工場や外食産業、小売業者等のニーズに合わせて小ロットから販売しています。冷蔵施設や貯蔵施設、低温倉庫等の施設も充実しており、生姜やにんにくを中心に、全国の生産者等から仕入れた各種青果物、農産加工品を「通年安定して取り扱うことができ」ということが、同社の強みです。

従業員と消費者、どちらも大切に

農福連携事業として「社会福祉法人平成会」の利用者を施設外就労として受け入れている同社(現在20人)。「細かな作業を担ってくれています。農業の現場で働き、土や新鮮な農産物に触れて五感を刺激することで、心の安定につながるようです。今後も農福連携事業は継続し、互いに学



- 1 常務取締役の片平忠明さんと自社製品。
- 2 貯蔵施設内には全国各地の青果物が並ぶ。
- 3 青果物の選別作業。この後、顧客ニーズに合わせて、小分けパックに。

DATA

〒029-3102
一関市花泉町金沢字運南田171-1
TEL 0191-82-4009
FAX 0191-82-4144
HP <https://www.marukoshi.com>

びを得ていければ」と、片平さん。現在、同社の従業員は約150人(内24人が長崎支店)で、平均年齢は40代後半。「地元農家の農産物(ピーマン、リンゴ等)の買受もしているため、ぜひ、若い世代にも、地元農産物の取り扱いや食にまつわる安全・衛生に興味を持ってもらいたい」と、若手人材確保にも意欲を見せると同時に、安心安全な食材を全国各地に提供し続けるために、人手不足を補う自動化や効率化を考えた機材の導入も検討しています。

生産現場と直につながることに「安全」で「おいしい」青果物を全国に提供する同社。生産者や品目などを絞り込んで産地契約を結び、ニーズに合わせて全国に送り出しており、その販路は全国に300社以上あります。天候等で収穫高が左右される青果物を、同社の強みである加工冷凍等の一次加工を取り入れることで、安定的に消費者へ安心・安心をお届けします。

今月のテーマ

地域運営の落とし穴⑵ 地域協働体(RMO)の存在意義



第66話

「見えない」部分にこそ、大事な役割

コロナ禍で書面開催が増えていた各種組織の「総会」ですが、今年度は、ほとんどが対面での開催に戻ったのではないのでしょうか。私たちも地域協働体の総会にいくつかご案内いただき、出席させていただきました。総会資料で1年間の事業を振り返る時間は、新年度を迎えるにあたり、気持ちが引き締まる思いになる瞬間でもあります。決算や事業報告の資料作成に携わる事務局さんたちへの労いの気持ちも忘れてはいけませんね。

一関市内では、地域協働体(RMO)の設立から10年程度の時間の経過があり(設立時期は地域ごとに異なるので、12年が経過している協働体も)、その存在は少しずつ定着してきているようです。一方で、「地域協働体って何?」と言う住民がいることも事実。そのことを気にかける役員等からは、「住民に認めてもらえる地域協働体にならなければいけない」という焦りや、切迫した言葉が出てくることもしばしば。この気持ち、ものすごく共感できます。

共感できるのですが、「住民に認められるために何をしようか?」と焦って、「住民が喜ぶ事業をしよう!」と発想してしまうのは、どうなのでしょう? 「事業」は地域協働体の大事な一部分ではあるものの、「目に見える事業」に関しては、結果的に住民の負担が増えてしまう可能性も。また、「何をしたら喜んでもらえる・参加してもらえるのか?」と、「ニーズ把握」に頭を悩ませ、ニーズを探れば探るほど泥沼にはまっていく「ニーズ把握の困難」という課題に直面してしまう様子も見受けられます。

他のRMOの事例を検索すると、配食サービスや移動支援などの福祉活動、子ども支援や小商売といった事業が多数出てきますが、「事業をする側」と「サービスを受ける側」が両想いにならないと、実現が難しいものばかり。せっかく良かれと思ってやってみても、利用されないようでは、住民が喜ぶ事業とは言えず、負担ばかりが増えるだけです。「継続は力なり」ではあるのですが、継続するものをいくつも抱えてしまうことにより、事業過多になってしまい、本来RMO(地域協働体)が担うべき地域の状況や課題を把握する機能が低下してしまいます。

「イベント事業」は、住民に直接関係し、「協働体が動いている」ということを分かりやすく伝えることにはなりますが、「コーディネート事業」こそ、「住民には見えないけれど、地域の将来のためには大事な動き」です。例え見えなくても、「取り組むことに対して自信を持つ」という「勇気」を出すことが必要です。

自信を持ちきれない背景には、「地域点検」などを行い、行政等への提言活動などを行っているにも関わらず、「話し合いの成功体験」や「繋ぐ成功体験」ができていないこと、があるように思います。

地域協働体に課題の把握や話し合いを求めても、その課題解決に関係各所が関わらなければ、「課題を把握し解決策を提言しただけ」で止まってしまい、地域協働体が自信喪失になるのも当然のこと。地域協働体でしっかり議論した上で、関係各所とも話し合いができる状況を創り出す。そこで関わった関係各所が、「地域の意見」として、話し合われた内容をピックアップしてあげることが、地域協働体の自信に繋がっていくことでしょう。

地域協働体の動きが住民に見えなくても、見えないところで頑張るのが地域協働体です。そこに関わる住民が議論に参加し、何気ない世間話の中で、「そのことは地域協働体で話し合っているから」と共有してくれる状況ができればベストではないかと思えます。「見えないところで頑張っているんだね」という認識になるのではないのでしょうか。地域協働体は、住民に直接関係することもあれば、住民ではなく、役職者に関係することもあります。地域協働体に関わって、初めてその存在意義に気づくこともあるでしょう。何をしているか分かるようで分かりにくい、見えるようで見えにくい、それが「コーディネート機能」の役割であり、宿命なのです。

ある地域で議論が紛糾した際、「俺たちは、金を払って話し合いをしているんだ!」という発言がありました。会費を払って議論に参加し、「見えないところで地域のために頑張っている場面」の象徴的な発言だったと今でも鮮明に覚えています。

「人が多かった時代」から、今後の「人が少なくなる時代」に向けての「システムの再構築」のために、「コーディネートする」ことが「地域協働体の存在意義」だと考えています。



行政側の認識も揃えていくため、各支所地域協働体が集まる機会を年数回持ち、情報・意見交換を行っています。

大東町ママさん・パパさんバレーボール大会の歴史を深掘りしてみた①

昭和30年	2町3村が合併し、「大東町」誕生。旧町村毎に「地区体育協会」も発足
昭和31年	「大東町体育協会連合会」発足 翌年、大東町が体育指導員を計7名委嘱
昭和39年	・東京オリンピックで日本女子がバレーボール金メダル獲得。全国的なバレーボールブーム到来。 ・(ブームを受け?)農夫症を訴える人に対し、 農作業の合間に気軽にできるバレーボール(全身運動)が推奨される
昭和41年	興田体育協会主催の「 第1回家庭バレーボール大会 」が開催される(会場:興田公民館の庭)
昭和42年	体育指導員らが中心となり「 大東町家庭バレーボール競技規則 」が定められる
昭和43年	大東町体育協会連合会主催の「 第1回大東町婦人バレーボール大会 」開催(会場は地区持ち回り)
昭和44年	「家庭バレーボール」を普及させるため、 大会の様子を8ミリビデオで撮影し、集落で鑑賞 した(姑さんに理解してもらった狙いもあった)。
昭和48年	・「大東町婦人バレーボール大会」の名称を「 大東町ママさんバレーボール大会 」に変更 ・「 第1回大東町ママさんバレーボール大会 」開催
昭和50年	参加チーム増大により、 大東中学校校庭と大東グランド(現大東野球場)に会場を固定
昭和51年	「大東町ママさん・パパさんバレーボール大会」の参加チームが 100チームを超える
平成元年	大東町のバレーボールに関する取組が「 朝日体育賞(朝日新聞社) 」受賞

バレーボールを中心としたスポーツ活動で、住民の健康づくり、地域の活性化に貢献したことが評価され、「大東町体育協会(当時の会長:金康弘氏)」が受賞。受賞式の様子▶



大東バレーボール協会事務局OB 小崎龍一さん (平成5年から令和3年まで)

全国的な動きも背景に、興田地区から大東全域に広がった「家庭バレーボール」。その歴史に携わった方々に当時の話を聞かせていただきながら、バレーボールが「文化」となっていく過程を深掘り(今月号では昭和時代、次号で平成以降)しました!



▲講習会の様子。割烹着姿の女性も(昭和42年)

高度経済成長期となり、男性が都市部に出稼ぎに。**女性が家を任せ、農業に従事することが増えたため、農夫症問題が顕在化する。**

当時のスポーツは、野球等、男性中心。女性がスポーツや運動をする機会は年1回の地区民運動会くらい。そのため「**農夫症解消という大義名分の元に、婦人会でも積極的に取り組んだ**」という背景も。

昭和30年代、当時の文部省は「**体力づくりを進めよう**」という動きをしており(昭和33年に文部省に体育局が復活したため)、**社会教育や社会体育を担う公民館にも働きかけがありました**。そこで、興田公民館の館長だった金野富夫さんが先進事例などを元に、**ブームとなっていたバレーをすくりに取り入れたんです**。興田地区の体育指導員・佐藤守正さんが高校時代にバレーをしていたことも幸いし、興田での普及が進みました。教育委員会の千葉浩朗さんも立役者の一人。興田で「**第1回家庭バレーボール大会**」を開催するにあたっては、**ルールなどの説明をする講習会や練習会も開催**されましたね。体育指導員が指導等を行ったはずですよ。



興田地区体育協会事務局OB 小山耕一さん (昭和43年から昭和49年まで)

昭和41年に町スポーツ振興審議会において、町教育委員会の諮問(スポーツ人口の増大、青少年の体育スポーツの振興)に対し、5つの答申がまとまり、その中の一つに「**家庭バレーボールの普及**」が。これを受け、**各地区の公民館等が講習会等を積極的に行った**。

9人制と6人制をミックスした**8人制(前衛・後衛4人ずつ)**。**年代別に出場枠を設け、多くの年代の参加を促進**。これまでに4回ルールを改正し、**集落の審判員養成のための審判講習会も開催**。

チーム力強化や、大会出場者を選抜するため、**地区や自治会、班対抗などでメンバー選抜試合**が行われることも(下写真②参照)。

きっかけは「農夫症対策」でしたが、しだいに大東町のバレーは「**人と人、集落と集落をつなぐ1つのツール**」となり、「**地域(集落)づくりの1つのエンジン**」となりました。それは昭和から平成にかけての「**大東町のまちづくり**」の「**大きな柱**」でした。また、ママさんバレーの日はパパが子守をする日。両親が楽しむ様子を子どもに見せる機会でもあったので、当初はパパさんとママさんを別日開催にしていた。大東町のバレーは、強さよりも**地域でのコミュニケーションや健康維持を目的**にしていたが、ママさん・パパさんバレーボールより高みを望んだ人はクラブチームに入って活動していました。多いときで大東町内に4チームありました。

実際に参加していた「当時のママさん・パパさん」たちの体験談

嫁いできて初めて出場したのは第3回大会。私の集落は強いと有名だったので、開会式ではユニフォームを隠し、**試合開始直前に上着を脱ぐ**ことで、相手に対策を立てられないようにしていた。(80代女性)
・隣町から大東に嫁ぎ、学生時代バレー部だったので「**おらいのお母さんはバレー部で、が、姑の口癖。バレーの練習には「茶碗洗っておくから早くい**が**いいん**」と言われた。(60代女性)
・姑もバレーをしていて、手ぬぐいをほっかぶりして練習していた。2世代でバレーをしている世帯も結構いた。(70代女性)
・単身赴任をしていたが、**大会3日前くらいには地元へ帰り夜間練習に参加**。いつかは地元へ帰ると決めていたので、そのための交流にもつながっていた。(70代男性)
・年齢でチームを見ていると痛い目を見る。腰を曲げていても上手い人がいた。(80代男性)

※1 岩手県町村会(1981)『まちづくりむらづくり事例集一』
※2 労働省婦人少年局(1966)『婦人関係参考資料第72号 最近の農村婦人の実情と問題点 昭和40年農村婦人問題連絡協議会から』
※3 松田克治(1979)『近代化農業に要請される体力とその対策』 ※その他の参考文献等は誌面スペースの都合上当センターHPにて掲載します。



①試合後の反省会は特にママさんにとっては何よりの楽しみ(昭和48年/浪民地区)
②「大原山間地区班対抗バレーボール大会(休耕田牧草地にて)」の様子(昭和58年)
③子どもをおんぶしたまま臨む表彰式(昭和62年)

次号では平成以降の歴史をご紹介します!

地域の「気になること」をセンタースタッフが独自に調査!

センターの自由研究

ミッション 89 暮らし調査「ママさんバレーNo.26 パパさんバレー①」

昭和40年前後から当市においても旧町村や地区単位で取り組まれてきたバレーボール。旧千厩町では昭和35年に「千厩町バレーボール協会」が発足し、旧室根村では昭和40年に「第1回家庭バレーボール競技大会」が開催されています。中でも旧大東町においては、昭和42年に「**大東町家庭バレーボール規則**」が定められて以降、県内屈指の「**バレーボールの町**」となっていきます。その背景や歴史を辿りながら「**大東町のバレーボール文化**」を紐解きます。※記載内容はあくまでも当センター独自調査の結果です。

■大東町とバレーボール

当市大東町が誇る文化「大東町ママさん・パパさんバレーボール大会」。その起こりについて、『大東町家庭バレーボール50回大会記念誌』には「昭和40年代当初、公民館の婦人学級に参加する人たちの中に、**農作業からくる腰痛や肩こりなどの農婦症を訴える人が多かった**。その対策として登場したのが**家庭バレーボール**です」と記載されています。現在では地域振興事業のような位置づけですが、当初は「**農夫(婦)症対策**」が目的だったのです。大東町の中での先駆けは興田地区でした。当時は公民館主催の「**婦人学級**」が頻りに開催されており、農村女性の抱える課題に向き合う中で「**農夫症**」に関する話題も。そこから、当時人気上昇中のスポーツであり、農夫症予防・解消にもつながると話題になっていったバレーボールに取り組んでみようという機運が。また、大東町では、農業に携わる人の農夫症予防対策と、集落のコミュニティ醸成の一環として「**スポーツ**」を推奨すべく、昭和32年、計7名の「**体育指導員**」を委嘱します。農作業の合間にバレーボールを用いて全身運動をする農家婦人が増え始めた昭和40年前後、体育指導員からは「**家庭バレーボール**」導入の先

■「農夫症」とは

「**農夫症**」は、農業に従事する婦人に症状が現れることから、当初は「**農婦病**」とされており、農業労働力の不足から農婦が過重労働となり、血清蛋白の低下をはじめ様々な異常等が原因となり、肩こり、後頭部の圧迫感、胃部や四肢の疼痛や貧血症状が現れることを言います。昭和27年の第1回農村医学会で、「**農婦**」だけでなく、男性や若者にも同様の症状がみられること、疾病というより「**症候群**」とみなすべきである」ことなどを理由に、「**農婦病**」に代えて「**農夫症**」という呼称が提されました。現代でも、医学用語としては「**農夫症**」と呼ばれ、**農家や農作業に従事する中年以降の男女に多く見られる「肩こり、腰痛、手足のしびれ、夜尿、息切れなど」の症候群とされています**。ではなぜ農夫症にバレーボールが有効とされるのでしょうか。その確

「東洋の魔女」が影響が……!?

昭和36年、全日本女子バレーが欧州遠征で24連勝し「**東洋の魔女**」と称されます。3年後の東京オリンピックでは、ソビエト連邦(現ロシア連邦)チームを破り、**日本が金メダルを獲得!**一躍人気スポーツとなったバレーボールは、国民スポーツとして浸透し、各地で「**ママさんバレー**」の講習会、試合等が開かれるようになります。そうした全国的なバレーボール熱により、昭和45年には「**第1回全国家庭婦人バレーボール大会**」が開催されたのです。当時、戦後の困窮した生活を再建させる担い手として積極的な活動を期待されてきた各地の「**婦人会**」にとって、女子バレー選手の活躍は、大きな刺激・話題となり、「**農夫症**」を切り口に、バレーボールに取り組む機運・チャンスにつなげていったのかもしれない。

かな医学的根拠は見つけられませんでした。大東町では「**腰を伸ばしたり、肩を動かすこと**」が多いスポーツであり、庭先でもできることから、**農夫症などの予防に役立つ**としています。労働省(現・厚生労働省)婦人少年局が昭和41年に発行した報告書では、農家婦人の「**過労防止対策**」を紹介する中で、その他の項目に「**バレーボール等スポーツの導入**」という事例記載があり、昭和54年発行の文献には、「**かがみ姿勢の多い農村の人々に対する指導として、バレーボール運動を取り上げる地域が多い**」という記述が。昭和40年代以降、農夫症対策としてバレーボールを取り入れた農村部が複数あったことが伺えます。

